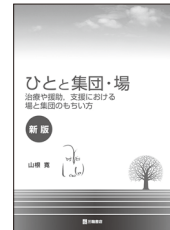


山根 寛 (著)

ひとと集団・場 新版 治療や援助、支援における場と集団のもちい方

白 岩 圭 悟

(京都大学大学院博士後期課程, 宇治おうばく病院, 作業療法士)



「ひとはひとの中に生まれ、ひとの中で育ち、ひととのかかわりに傷つき、ひととの交わりで癒される」。時代や文化の違いを超えて、共通する普遍性がこの言葉にはある。社会的存在である私たちは、存在の始まりから一生を終えるまで、さまざまな「集団」と「場」の中で生きている。リハの専門職である私たちの仕事は、対象者にふさわしい「集団」と「場」を取り戻すことであり、再構築することである。そしてそのプロセスにおいて、作業療法士は対象者とよりよい関係性を築く手段として「作業」を用い、そこで生まれた関係性が、時に大きな力をもつ。つまるところ、「ひと」が「ひと」を治すのである。冒頭の言葉には、そういった作業療法の本質や豊かな臨床が行間にあふれている。

開いた最初の項から、著者がどのように対象者と向き合い、どのような実践を行い、そこからどのような概念を引き出したかがみえる。読む者は、自分自身の個人的体験と重ね合わせながら、「ひとが場を共にし、共に何かをする」という現象の意味について、深い

洞察を得ることができる。そして、気がつくと「ひととのかかわり」について、心のうちで自分自身と対話することになる。

作業療法実践の中核は「作業」にあることは常識である。しかし、それと同じくらい重要なものに、作業療法士のかかわり方と場の構成がある。対象者の問題は常に「個」の問題として認識されているが、現実の作業療法場面にはたいてい、他の対象者と、場合によっては他のスタッフがいる。そして、この対象者を取り巻く他の人々の存在が、作業療法の治療効果を高めることを私たちは感覚的に知っている。本書はその感覚に「確からしさ」を与えてくれる。ひとが集まることの意味、ひとを集めることの意義、集団力動（グループダイナミックス）の治療的有用性、場（トポス）の利用という視点、作業療法における集団プログラムの必要性があらゆる方向から語られ、Erikson, Winnicott, Bowlby, Mosey といった先達が構築した「知」に対する深い洞察と説明も加えられている。

「変わらないために変わり続け

る」という著者の信念がこの新版を生み、動的平衡の視点や近接領域に関する知見、病院の作業療法部門変革の事例、集団を通して自己認識と自己変容に至った著者自身の個人的体験が新たに加えられている。いずれも「今」という時代に必要な「臨床の知」である。

「それは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」と鲁迅はいう。作業療法という十分に開かれていない道を、著者が何を思い、何に気がつき歩いたのかを読み解くことは、その道を広くしっかりした誰かが通れる道にするという私たちの使命を感じていくプロセスでもある。数値化でしか示せないエビデンスに対する疑問が提起され、新たなエビデンスの構築に向けた研究が盛んになされるようになった今だからこそ、本書の新版は領域を超えて多くの作業療法士の羅針盤になると確信している。

〔 B5 判 270 頁 3,500 円 + 税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357 〕